

島津製作所 知財部： 生成AI活用の 「セカンドステージ」

省力化・コスト削減から「事業起点の知財」
「AIエージェント」「IP ROIC」へのBPR進化の軌跡

Phase 1 (ファーストステージ)

業務効率の極大化



- 定型作業の代替
- コスト・時間の大幅削減
- FTO調査等の自動化



The Pivot (転換点)

AIネイティブへのBPR

「AIを足す」のではなく、
AIを前提に業務プロセスを
根本から再構築する

Phase 2 (セカンドステージ)

企業価値創造のエンジン

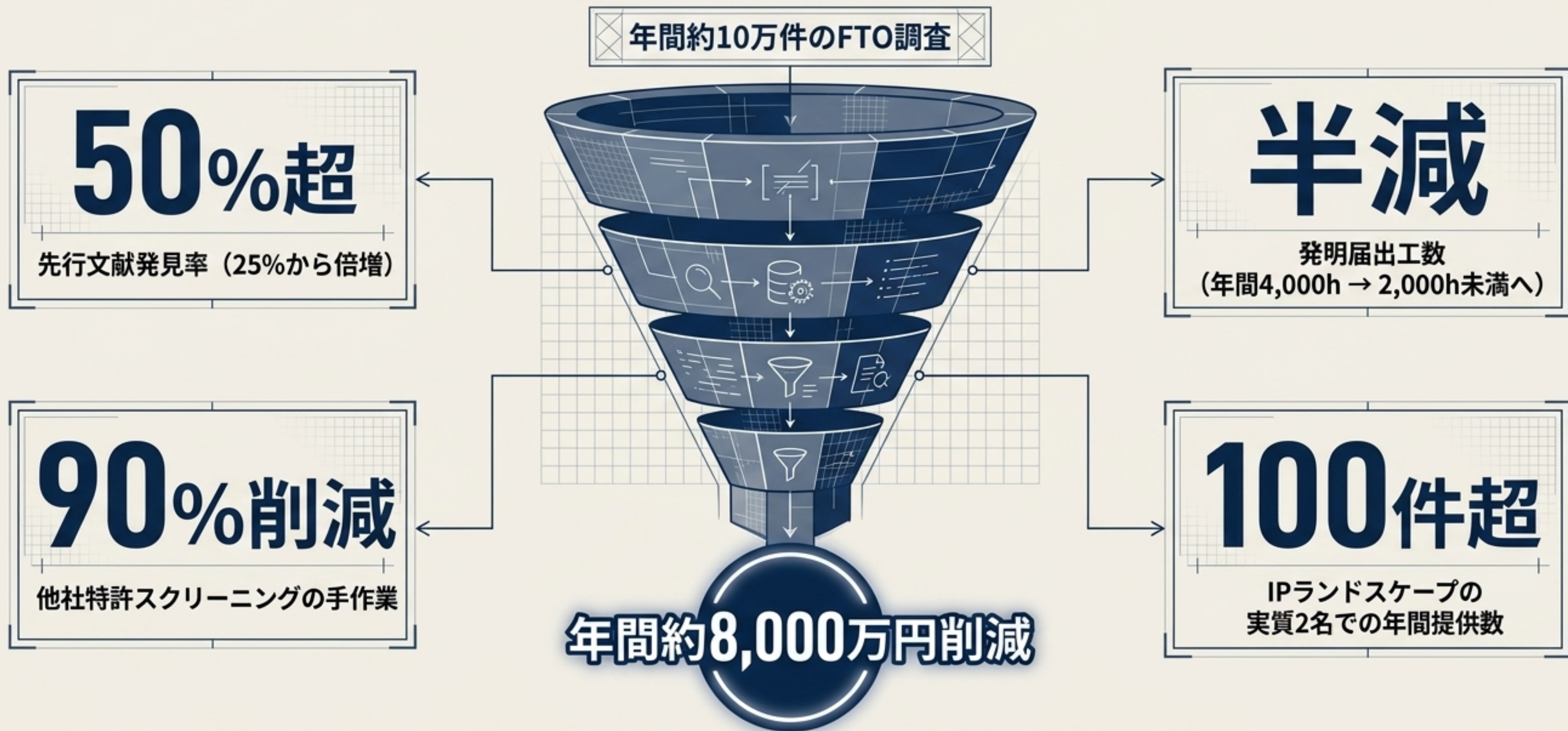


- 事業計画起点の知財
- 人間参加型AIエージェント
- IP ROICによる貢献可視化



ファーストステージの到達点：知財業務の圧倒的省力化

2023年からの3か年計画「知財力50%向上、業務量30%削減」に対する具体的成果



省力化はゴールではなく、前提条件に過ぎない

「既存の知財業務にAIを足す」 発想からの脱却。

Old Paradigm

部分自動化 (Partial Automation)

今までのやり方を、AIで速くするだけ。

New Paradigm

AIネイティブな知財業務 (AI-Native IP)

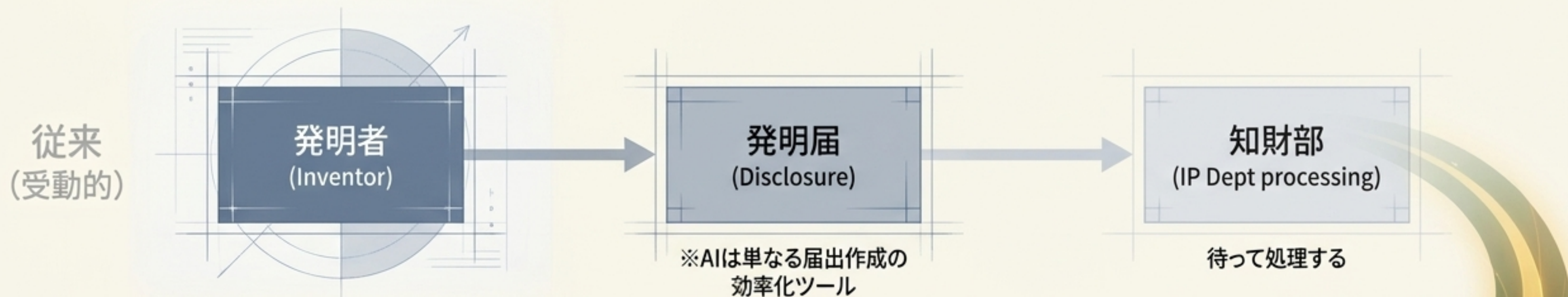
AIが存在することを前提に、「入力・検討・出力」の業務プロセス全体を根本から再構築する (BPR)。

パラダイムシフト：ファーストステージ vs セカンドステージ

【観点】	【ファーストステージ】	【セカンドステージ】
目的	省力化・高速化・コスト削減	企業価値創造・事業競争力向上
AIの位置づけ	人の作業を支援・代替するツール	業務プロセスを動かす基盤／将来はエージェント
発明の起点	発明者・発明届	事業計画・顧客価値・研究開発計画
知財担当者	検索・読解・文書作成を担う作業者	AI出力を検証し、事業価値を判断する意思決定者
知財部の姿勢	届出を受けて処理する「待ち」	事業に必要な知財を取りに行く「攻め」
成果指標	工数・時間・外部費用	事業貢献・企業価値・知財貢献利益・IP ROIC等
生じた余力	コスト削減効果として把握	知財・新事業へ再投入する（資金循環）
将来像	AIを使う知財部	AIエージェントが働き、人が判断する知財部

Pillar 1: プロセス改革 — 「待ち」から「攻め」へ

情報の起点を「発明者」から「事業計画」へ大転換



Pillar 2: 人材と暗黙知 — 作業者から「判断者」へ

属人的な経験則を、再現可能な組織の資産へ変換する

作業の移行

大量の文献読解・検索・
初稿作成は完全にAIへ。

人間の新役割

AI出力の論理的検証、
事業価値の判断、
事業部門との対話・説得、
高度な戦略判断に専念する。

The Tacit Knowledge Funnel



特許事務所やベテラン担当者に蓄積された実務上の「暗黙知」を言語化。
再現可能な判断ロジックとして組織資産化する。

Pillar 3: システム構想 — 自律型AIエージェントの未来

ツールとしてのAIから、業務を自律実行するエージェントへ（将来構想）



Pillar 4 (Finance) : 資金循環のフライホイール

効率化で生み出した資金と時間を、次なる成長へ再投資する



Pillar 4 (Metrics): 測定不能を測る「IP ROIC」への挑戦

「知財があることによって得られた利益」の可視化（将来構想）

IP ROIC =

分子：知財貢献利益
(IP Contribution Profit)

AIを用いて製品・機能・
特許・顧客の購買理由・
売上を関連付けて推定。

分母：知財投資 + 研究開発投資
(IP Investment + R&D Investment)

範囲を厳密に定義。

Measurement Strategy

絶対額の算出だけでなく、前年比（相対値）や感度分析を組み合わせ、
データを継続的に蓄積・測定する。事業貢献を経営言語で証明する。

統合エコシステム：

「AIネイティブな知財組織」の全体像

各要素が独立しているのではなく、完全に連動した
自己強化型のビジネスエンジンとして機能する



総括：知財改革の「第2幕」がもたらす進化

リスク管理部門から、経営を牽引するプロフィットセンターへ

第1幕（過去）

生成AIによる知財業務の省力化・コスト削減。
権利取得・リスク管理を中心とする部門。

第2幕（現在～未来）

事業・経営に能動的に貢献する
部門へと根本的に進化。
経営への戦略的価値の解放。

AIは知財部から仕事を奪うのではなく、
知財部が本来発揮すべき「経営・事業への戦略的価値」を解き放つ。

出典および事実確認状況 (Fact Check & Caveats)

公開情報で確認済 (Verified Public Data)	「知財力50%向上、業務量30%削減」、FTO年間約10万件、外部コスト約8,000万円削減、発明届出工数50%削減、手作業90%削減。
講演資料等 (Seminar Specifics)	先行文献発見率 (25%→50%超/最新約55%)、年間工数4,000h→2,000h未満、IPL年間100件超。(※定義・母集団は原資料への確認が必要)
将来構想 (Future Vision)	「AIエージェント化」および「IP ROICの構築」は将来構想・検討段階を含み、現時点で全てが実装済みではない。

【参照元】2026年8月5日 関西知財セミナー 島津製作所 阿久津好二氏 講演内容、Genzo AI公式サイト、SHIMADZU TODAY 他公開資料。
※本資料内の「ファーストステージ」「セカンドステージ」「AIネイティブな知財業務」は整理のための独自概念です。